

目次

評論 一九〇二年～一九二五年

雪中慘事 李人植（都新聞） 11

朝鮮の農業(上)(下) 無記名（都新聞） 11

鮮人の草したる寄稿(一)(二) 南宮璧（朝鮮新聞） 15

藝術の使命 朱耀翰（白金學報） 18

朝鮮の諸公に訴ふ 廉尚燮（デモクラシイ） 19

朝鮮統治政策に就いて 南宮璧（太陽） 21

朝鮮文化史上の光輝點 南宮璧（太陽） 25

ミューズを尋ねて 俞鎮午（清涼） 29

動く魂と生活 金斗鎔（嶽水會雜誌） 57

評論 一九二六年～一九三〇年

プロとダダ レフ・金熙明（文藝市場） 75

野獸主義提唱とその不完成なる理論(その1) 金熙明（野獸群） 77

朝鮮の文壇・朝鮮の文士 李淚聲（文章俱樂部） 79

共同戦線の一方 金熙明（進め） 81

新幹會の使命 洪命憲（朝鮮思想通信） 82

- プロ藝術の陣營より 金熙明 (詩潮) 83
- メーデーを前にして 金熙明 (文藝戦線) 85
- 朝鮮に於ける演劇の變遷 李基世 (朝鮮及滿洲) 87
- 朝鮮の古教文獻及び傳奇小説の鼻祖 崔南善 (朝鮮思想通信) 90
- 朝鮮の新興文學運動(一) 柳完熙 (朝鮮思想通信) 91
- 朝鮮の藝術運動 李北滿 (プロレタリア藝術) 105
- 朝鮮とその守護神 李北滿 (プロレタリア藝術) 107
- 通俗文學の建設 朴英熙 (調査資料) 朝鮮の言論と世相 113
- 愛國文學に就て 金東煥 (調査資料) 朝鮮の言論と世相 114
- プロレタリア藝術團體の分裂と對立 金熙明 (進め) 117
- 朝鮮藝術運動の現段階 金熙明 (前衛) 119
- 山梨總督を迎へるに際して 李北滿 (プロレタリア藝術) 121
- 二月のプロレタリア文學 金熙明 (前衛) 123
- 朝鮮に於ける無産階級藝術運動の過去と現在(一) 李北滿 (プロレタリア藝術・戦旗) 131
- 若き朝鮮人の願ひ(一)(二) 李光洙 (朝鮮思想通信) 143
- 朝鮮の人形芝居 宋錫夏 (民俗藝術) 155
- 朝鮮文藝變遷過程(1) 八峰學人 (金基鎮) (朝鮮思想通信) 161
- 朝鮮農民の爲に 安二孫 (農民) 184
- 最近に於ける朝鮮文藝總觀 李源圭 (朝鮮及滿洲) 185
- 朝鮮文壇の紹介 李壽昌 (週刊朝日) 195

朝鮮映畫の諸傾向に就いて	林和(新興映畫)	197
農民イデオロギーの確立へ	李均(農民)	207
朝鮮に於ける近代劇運動の終焉	林華(プロレタリア科學)	211
朝鮮に於ける我々の戰術	李均(農民)	221
評論	一九三一年—一九三四年	
朝鮮に於けるプロレタリア藝術運動の現勢	安漢(ナツプ)	227
朝鮮の農村と農民文藝	李均(農民)	239
日本文學に於ける朝鮮の面影	崔南善(朝鮮之圖書館)	245
農民文藝と方言の問題	李均(農民)	267
朝鮮に於ける演劇運動の現情勢	申鼓頌(プロット)	273
朝鮮近代文藝	金東仁(朝鮮及滿洲)	277
朝鮮の文學	李光洙(改造)	283
朝鮮のプロ文學	金斗鎔(帝國大學新聞)	291
日本に於ける民族演劇の現勢	高飛(演劇新聞)	293
朝鮮のプロ文學の現狀	金斗鎔(プロレタリア文學講座)	295
優秀より巨大へ	張赫宙(文藝首都)	311
朝鮮の文學について	朴勝極(文化集團)	319
神ながらの昔を憶ふ	崔南善(京城日報)	327
論理的レアリズム	李源朝(黑潮)	333

半島新人集（『大阪朝日新聞』朝鮮版）

- ソロバンと劇場①③ 尹白南 343
- インテリ女性の家(A)③(C) 白信愛 347
- 朝鮮文學の現在：これから(A)③(C) 金八峰 351
- 美術朝鮮の足跡(一)④ 金復鎮 355
- 民衆の情緒と年中行事①③ 宋錫夏 361
- 朝鮮文人の生活相①③ 金東仁 364
- 詩におけるモダニズム①② 金起林 369
- 天下大將軍の話(1)(2) 孫晉泰 372
- 朝鮮映畫製作の實際①② 金萬益 375
- 世界文學と朝鮮文學①③ 鄭寅燮 379
- プロ文學に就て①② 李箕永 384
- 朝鮮の文壇を語る①③ 廉想涉 387
- 兒童朝鮮を直視して①③ 金素雲 391
- 朝鮮の詩壇を語る①③ 朴八陽 396
- 陶磁のこと①③ 李泰俊 399
- 一演出家としての回顧と待望①② 洪海星 403
- 朝鮮における文學精神の探求、模索①③ 李軒求 406
- 現代朝鮮のモボ、モガ風土記①③ 咸大勳 410
- 朝鮮女流作家短命記 朴花城 414

朝鮮の劇界と新劇運動①② 徐恒錫 416

朝鮮の舞踊 宋錫夏（旅と傳説） 421

『農樂』と蓄音器 朴勝極（文化集團） 433

作品出典一覧 441

（目次表記について）

- ・上から作品名・著者名・（本来の名）・（掲載紙誌／掲載書）の順。
- ・連載作品で通号表記のないもの及び、通号数に誤りがある作品についてはすべて（全〇回）とした。
- ・漢字表記については原則として原本に拠った。